

## 所員自著紹介

1. 『色彩の快—その心理と倫理—』
2. 三星宗雄
3. 御茶の水書房
4. 2014年3月31日発行
5. 318ページ

本書の構成は以下のようになっている。内容は大きく「遠感覚と近感覚」、「色彩地理学」および「色彩倫理学」に分けることができる。感覚を環境の中の遠方の情報をもたらす遠感覚（視覚、聴覚）とごく近辺の情報をもたらす近感覚（触覚、味覚）に分ける二分法は現在特別に注目を集めているわけではない。しかし進化の過程で備わった順番やその本来の機能および感情（快不快）との結びつきなど際立った違いがある。第1章ではそうした違いからさまざまな感覚・知覚の現象を再検討することの可能性を論じた。

「色彩地理学」では文字通り色彩の現象を地理学的見地から解釈することの意義を、また「色彩倫理学」では、騒色公害など環境色彩の問題は、1つの倫理学であるとの視点に立って、その実態および解決策について論じた。

まえがき

## 第1章 色の感覚は遠感覚

## 第1節 遠感覚と近感覚

## 第2節 視覚的欲求と視覚的快適性

## 第3節 形と運動と色のイメージ

## 第4節 色弱模擬フィルターを通した色彩感情

## 第2章 色の力・明るさの力

## 第3章 美と調和の間：Moon &amp; Spencerの色彩調和論における2, 3の問題

## 第4章 色彩の地理学

## 第1節 色彩地理学の可能性

## 第2節 公衆トイレのアンソロポロジー

## 第3節 沖縄の色

## 第4節 韓国色彩事情

## 第5節 アマゾン・メモー色彩・環境・熱帯雨

林一

## 第6節 アマゾンの色彩：その測色学的研究

## 第5章 色彩の倫理学

## 第1節 日本における騒色公害の系譜と景観問題

## 第2節 風景の中の自販機

## 第3節 ユニバーサルデザインはどこにある

## 第4節 カラーユニバーサルデザインの実現に向けて

(三星宗雄)

1. 書名：『先住民運動と多民族国家——エクアドルの事例研究を中心に』
2. 著者：新木秀和
3. 御茶の水書房
4. 出版年月：2014年3月
5. ページ数：全350頁 (xi+337頁)

現代世界では民族運動と国家の変容過程は密接に関連して展開する。1990年代以降ラテンアメリカでは、アンデスやメソアメリカを中心に先住民運動が活発化するとともに、ボリビアやエクアドルなどでは多民族国家形成への志向が強まっており、それらの動向は社会運動や国家のあり方をめぐる議論に刺激を与えてきた。

本書は、先住民運動の展開と多民族国家形成の関係を、エクアドルの事例を中心に多角的に分析したものである。第I部と第II部では、先住民運動の形成と展開をエクアドル現代史との関連で詳述し、多民族国家の形成と関連づけて論じている。そのため、運動諸組織が提起する多民族国家思想の動向に着目し、主体となる組織や活動家の詳細なデータを整理しつつ相関関係を提示した。また、多民族国家の視覚的表象として先住民地図や人口センサスなどにも目配りすることで総合的な分析を行った。第III部では、エクアドルの事例分析を現代世界とくにラテンアメリカの域内状況との関連で位置づけ、社会運動論や国家論などの

理論面での考察も試みている。

人文学研究叢書 34 として刊行された本書は、個人の研究書としては最初の 2 冊のひとつである。貴重な機会を与えていただいた関係者にこの場をかりてお礼を述べたい。

(新木秀和)

1. 書名：*Reinventing Citizenship: Black Los Angeles, Korean Kawasaki, and Community Participation*
2. 著者：Tsuchiya, Kazuyo
3. 出版地・出版社：Minneapolis: University of Minnesota Press
4. 出版年月：April, 2014
5. 頁数：280 頁

本書は、アメリカ黒人、在日コリアンがいかに異なった立場からアメリカ及び日本の「市民権」概念の書き換えを行ったかを、ロスアンジェルスと川崎の事例から、同時代的に考察するものである。リンドン・B・ジョンソン政権下で行われた「貧困との戦い」の中心を成し、「貧困層」の参加を目標として掲げたコミュニティ活動事業 (CAP) を、CAP の影響下で考案、実施された日本の「モデル・コミュニティ事業」と比較した。そして、米国及び日本政府が行ったそれぞれの「コミュニティ」事業に対して、ロスアンジェルスと川崎の在日の活動家がいかにオルタナティブな「コミュニティ」及び「福祉」像を提供したのかを考察した。アメリカの福祉国家の内側から貧困、労働、福祉をめぐる問題に取り組み、「住民参加」を政治参加の機会へ転換させた黒人側の戦略と、日本の福祉国家の外側から「市民」の定義を問い直し、国籍条項撤廃及び福祉権をもとめた運動へつなげた在日コリアンの活動家の戦略を比較し、二十世紀の福祉国家史／都市史／黒人、在日の運動史の文脈に位置づけた。その際、在日の活動家がアメリカの黒人解放運動と神学をいかに受容し、「翻訳」し、自らの運動の糧としたのかを分析することで、両運動が連結し、国境を越えて展開する過程を詳らかにした。

(土屋和代)